

7月2日 年間第13主日

知 1:13~15,2:23~24 IIコリ 8:7~15 マコ 5:21~43

1. マコ

私たちが主日のミサでその死と復活を記念するキリストは、かつて娘を12年間の病から救い出し、死んだ少女をさえ再び生き返らせた方であること、そしてこの方が「世の終わりまで、いつも」(マタ 28:20)歴史の教会と共に歩んでおられる救い主であることを、感謝しましょう。

今朝のテキストの中で特に注目すべきイエスの言葉は、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」(v.34)と、「恐れることはない。ただ信じなさい」(v.36)の二つです。“信仰”という用語を、教会は伝統的に“信条”を指すものとして理解して来ました。信条が“わたしは信じます(クレド)”という言葉で始まっているのは、これが“(カトリック)教会の信仰”であるという表明だからです。

ところが現代のキリスト者が聖書を読むときには、それが信条とはおよそ無関係な通俗的な信仰理解に置き換えられてしまうのが普通です。それは教会が久しく“信条”を軽んじ、教導職も信徒も共に聖書をその本来の意図に従って読むことから遠ざかっていたためです。“信条”は、聖伝および聖書とは別の独自の教義を主張しているのではありません。そうではなくて、これは私たちが聖書を正しく読んで、そこから神のこばを聞き取るための権威ある指針なのです。

このテキストに登場する12年間の病から救い出された娘も、その後は生涯健康で病気知らずであったということはないでしょうし、再び生き返らせていただいた少女も、何十年か後には間違いなく年を取って死んだのです。ただそれだけの奇跡に過ぎなかったのなら、どうしてそれが“救い”であり得るのでしょうか。しかし使徒たちの宣教によって誕生した教会にとっては、イエス・キリストの救いとは、罪と死からの救い、神の国への復活に至る救いでありました。“信条”はその末尾を“死者の復活と来世のいのちを待ち望みます(信じます)”という宣言で結んでいます。実に「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」(ロマ 8:24)。

2. 知

v.14 「生かすためにこそ、神は万物をお造りになった。」

恐らく紀元前一世紀頃に書かれた“知恵の書”は、イスラエルに受け継がれて来た旧約聖書への有益な解釈を私たちに提供してくれます。その一例を今朝のテキストに見ることが出来ます。

神が罪を創造されたのではなく、罪は神の創造の御業に対する反逆ないし否定として入り込んで来たという理解が、ここで述べられています。キリストは、地上に病や苦しみや悲惨や戦争のない平和な世界を造るために、民衆を教えたり各種の奇跡を行ったりしたではありませんでした。それらはすべて世界が罪に支配されていることの当然の結果であって、「罪の支払う報酬は死です」(ロマ 6:23)。キリストは私たち

を罪から救い、死を滅ぼすために(Ⅰコリ15:26)救い主として受肉し、十字架の血によって御自分の民を贖われました。「私たちの主イエス・キリストによって(罪と死への)勝利を賜る神に、感謝しよう」(Ⅰコリ15:57)というのが、教会の信仰です。

3. Ⅱコリ

マケドニアとアカイアの教会は、当時窮乏の中にあったエルサレムの教会の信者たちを援助するために、自発的な募金を始めていました。ここで「慈善の業」(v.7)と呼ばれているものは、教会が事業として行う外の世界への施しではなくて、救われたキリスト者たちとの相互扶助として捉えられています。

エジプトを出たイスラエルの人々の共同体は、荒野で天からのパンを与えられて、約束の地に到着するまで養われました。朝ごとに人々は宿営の周りに出て、ある者は多く集め、ある者は少なく集めました。使徒パウロはここで、それをみんなで分け合ったので、「多く集めた者も余ることなく、わずかしかなかった者も不足することはなかった」(v.15)と解釈しています。各地の教会の信者たちは、共にキリストの血によって贖われ罪赦された民であって、御国を受け継ぐキリストの再臨の日に向かって旅しているのだという仲間意識を強く持っていました。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」(Ⅱコリ11:29)とは、そのことでした。

現代の教会が、現代のキリスト者が、自分たちは神の国の約束と復活の希望を共有している民なのだという信仰に、再び目覚めることを、天上のキリストは今朝の朗読配分を通して呼びかけておられます。どうか私たちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、私たちに知恵と啓示との霊を与えて、心の目を開いてくださいますように(エフェ1:17-18)。 ハレルヤ、アーメン。

7月9日 年間第14主日

エゼ 2:2~5 IIコリ 12:7b~10 マコ 6:1~6

1. マコ

vv.5-6 「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほか何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。」

マルコ福音書だけが語っている二つの率直な表現に、私たちの注意を向けましょう。先ず第一はイエスが「人々の不信仰に驚かれた」という表現です。“神様でも、ギョッとなさることがある”というユーモアだと思いますか？ そうではなくてこれは、イエスに対する故郷の人々の反応は“神の期待に応えるものではなかった”という意味です。

私たちは、いろいろな主張や見解を語りますが、神はそれらが相対的に正しいか否かではなくて、御自分の期待に応えるものであるかどうかを見守っておられると、この物語りは教えてくれます。「信仰がなければ、神に喜ばれる(神の期待に応える)ことは出来ません」(ヘブ 11:6)とは、初代教会がイスラエルから受け継いだ基本的な理解でありました。

第二は、イエスが「そこでは……何も奇跡を行うことがおできにならなかった」という表現です。“神様にも不可能ということがある”と、いかにも分かったような説明がなされるとき、それがどれほど聖書の語る信仰の世界にとって異質なものであるかを、多くの信者は気づきません。マルコ福音書が伝えるこの表現を“聖書の中の言葉”として理解することから、殆どの現代のキリスト者は遠く離れているからです。第三イザヤの叫びが聞こえるではありませんか。「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が……」(イザ 59:1-2)。

初代教会がイスラエルから受け継いだこれらの基本的な信仰理解に再び目覚めることを、マルコ福音書は私たちに要求しているのです。

2. エゼ

v.5 「彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。」

預言者がいたとは、彼を遣わされた神自らが、イスラエルに向かって確かに語っておられたということでありました。その時代の人々がそのことを理解しなかったとしても、「神の言葉はとこしえに立つ」(イザ 40:8, 55:11)のです。

ローマ・カトリック教会は、神の啓示の源泉が聖伝と聖書であることを明確に宣言して来ました。確かに現代の教会に向かって、聖霊の交わりの中で父と共に生きて支配しておられる天上のキリストは、聖伝と聖書を通して「神の秘められた計画」(Iコリ 2:1)を語り続けておられます。たとえ多くの雑音と共にであっても、

間違いなくキリストの福音は私たちのところに届いているのです。

十字架に掛けられたイエスを見たユダヤ人たちも、ローマの兵士たちも、イエスが神の子であるとは知りませんでした。彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」(ヨハ 19:37)という聖書の言葉は実現していました。そのように、多くの人々の心に不信仰の覆いが掛かっているとしても(II コリ 3:15)、キリストの福音は全地に響き渡っています(ロマ 10:18)。

この“聖書の学び”から、聖書に関する知識ではなくて、キリストの福音を聞く人は幸いです。

3. II コリ

使徒パウロでさえ、自分の人間的力量と業績によって、福音の宣教をより効果的に進めたいという思いから逃れることは出来ませんでした。「それで、思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました」(v.7)。現代に至るまで、歴史の教会はいつも類いの思いを持って、改宗者獲得によるキリスト教文化の拡張に邁進して来たと言うことが出来ます。

福音宣教の主体は神であって人ではないことを、私たちは使徒パウロから学ばなければなりません。彼が旧約聖書とイスラエルの信仰に関してずば抜けた造詣を持ち、まれにみる有能な人材であったことは事実です。しかし彼は重症の病的欠陥を持ち、視力も極端に弱かった(ガラ 4:13-15 参照)というマイナス要素を、決して軽視してはならないのです。そしてキリストの福音は、彼の人間的弱さと無力の中で、その力を発揮しました。

私たちは“パウロ教”や“ペトロ教”の信者ではなくて、キリスト者、すなわちキリストの福音を聞いて救いを受けた者たちであることを、再確認しましょう。「キリストの力がわたしの中に宿るように」(v.9)、文化としてのキリスト教にではなくて、キリストの福音に耳を傾けることを再発見しましょう。現代のキリスト者である私たちも、「“誇る者は主を誇れ”と書いてあるとおりになるためです。」(I コリ 1:31)

ハレルヤ、アーメン。

7月16日 年間第15主日

アモ 7:12～15 エフェ 1:3～14 マコ 6:7～13

1. マコ

v.12 「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。」

このマルコ福音書が書かれた時代背景には、使徒たちに続く第二世代のキリスト者による宣教があることを、理解しましょう。初代教会が“宣教”というものをどのように理解していたかを、聖書から正しく聞き取ることが大切です。それは使徒パウロの言葉を借りれば、「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」(使 20:21)でありました。

その時代の宣教には、昇天の主が共に働いておられる“しるし”が伴うことがありましたが(v.13, 16:20 参照)、それは近代以降のキリスト教が海外伝道の効果的な手段の一つとして取り入れた教育や医療とは、本質的に異なるものでした。そのような事業が宣教の一部であるとか、まして宣教に代替する役割を持ち得るという理解は、新約聖書にとっては異質なものです。

“悔い改め”とは、主イエス・キリストに対する信仰に伴うものであって、従ってキリスト信者の行為です。決して教会が外の世界の人々を教育する、道徳的目標のようなものではありません。教会の宣教は、「信じる者すべてに救いをもたらす」(ロマ 1:16)ための、使徒たちによる“悔い改めさせる宣教”の継続だからです。

2. アモ

預言書という形で記録された最初の預言者であるアモスは、神の民イスラエルとは神の審判の対象以外の何物でもないことを理解した、恐らく最初の人でありました。彼は叫びました。「イスラエルの人々よ、主がお前たちに告げられた言葉を聞け。…… 地上の全部族の中からわたしが選んだのは、お前たちだけだ。それゆえ、わたしはお前たちを、すべての罪のゆえに罰する。」(3:1-2) 北イスラエルの王ヤロブアム二世(紀元前 786-746)にとっても、またベテルの祭司アマツヤにとっても、これは耐えられない言葉でありました。しかし、この預言は主から出たものでありました(v.15)。

教会の宣教が使徒たちによる“悔い改めさせる宣教”の継続であることを正しく知るには、その“悔い改め”とは、まさにキリスト者自身の行為であることを理解しなければなりません。1ペト は語っています。「今こそ、神の家から裁きが始まる時です。わたしたちが先ず裁きを受ける……」(4:17)。現代のキリスト者は、この言葉に耐えられるでしょうか。

自らが神の裁きの対象であることを理解しないキリスト者は、キリストによる罪の赦しと贖いの恵みが私たちにとって、“金や銀のような朽ち果てるもの”以上に尊い(1ペト 1:18-19)ということ、実感することが出来ません。聖伝と聖書によって教会に受け継がれて来た“使徒たちの宣教”を、実際には殆ど全く学ば

ず、また自ら学ぼうとしない現代のカトリック信者の姿を、当時のヤロブアム二世と祭司アマツヤに見る思いがしないでしょうか。

3. エフェ

w.7-9 「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。……神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、“秘められた計画”をわたしたちに知らせてくださいました。」

既にキリストによって贖われ罪を赦されてしまったのだから、最早悔い改める必要はなくなったと理解して、“悔い改め”を過去の入信の際の通過儀礼のように考えるなら、それは間違っています。多くのキリスト者が“悔い改め”を、まだ救われていない外の世界の人々に教える伝道上の教義のように考え、自分たちにとっては最早かつてほどの重大さはなくなったと勘違いしています。

「わたしたちも、……以前は……、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした」(エフェ2:3)とは、決して過去の思い出のことではなくて、今やキリストによって贖われ救われた初代教会の人々の、現在の信仰宣言でありました。イエス・キリストは、私たちが受けるべき終末の裁きを私たちに代わって十字架の上で自ら受けてくださったのであり、その担ってくださった罪は外ならぬ私たち自身のものなのです。この恵みを知って救われたキリスト者だけが、真に悔い改めて福音を信じる者となります。

教会だけが、教会こそが、自らを神の裁きの対象としての“神の怒りを受けるべき者”であると理解し、悔い改めて福音を信じる民なのです。“秘められた計画”、すなわち教会が御国を受け継ぐ約束は、使徒たちによる“悔い改めさせる宣教”によって私たちに知らされました(v.9)。教会は、この約束を保証する聖霊で証印を押されている民だということを(w.13-14)、感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

7月23日 年間第16主日

エシ 23:1～6 エフェ 2:13～18 マコ 6:30～34

1. マコ

v.34 「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」

福音書は、これに耳を傾けるあらゆる時代の人々に、死人の中から復活して生きておられる主イエス御自身が、今も真の羊飼いとして語りかけ、教えておられるのだということを想起させてくれます。歴史の教会には使徒たちの後継者である司教たちがいることを、私たちは知っています。ところが、そこにはイエスの後継者はいません。なぜならイエスは復活して父なる神の右の座に着き、今も自ら牧者として教会に語りかけ、教えておられるからです。

しかし、その教会の姿は「飼い主のいない羊のような有様」であることを、これまで多くのキリスト者は直視しようとしませんでした。20世紀カトリック教会の大神学者といわれる故カール・ラーナーは、多くの教導職による教会の現状についての認識を、“頑迷な保守主義と、口外されない密かな絶望との奇妙な混合”であると鋭く指摘しています。かつてモーセが主に訴えた「主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにならないでください」(民 27:17)という祈りは、今日決して不要になってはいないのです。

2. エシ

“ユダの王ヨヤキムの子コンヤ(王下 24:8 のヨヤキン)は、もはやわたしの右手の指輪ではない。わたしはあなたを指から抜き取る”(22:24)という主の言葉を告げたエシミヤは、彼に続くユダの最後の王ゼデキヤについても「わたしの牧場の羊の群を滅ぼし散らす牧者」(v.1)という主の宣告を語りました。それが南王国ユダの現実であることを痛切に知っていた彼の姿は、システーナ礼拝堂の天井画の中に“悩めるエシミヤ”として描かれています。

そのエシミヤの預言の中に、やがてダビデの子孫から生まれて私たちの救い主となるイエス・キリストへの希望が語られていました。「彼の世にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む」(v.6)のは、彼が自ら主の羊たちを牧する者となるからでありました。後に預言者エゼキエルが「まことに主なる神はこう言われる。わたしは自ら自分の群を探し出し、彼らの世話をする」(エゼ 34:11)と語ったように、あらゆる混乱と絶望の現実の中にあっても、「永遠の契約による羊の大牧者、わたしたちの主イエス」(ヘブ 13:20)が新しいイスラエルである教会を牧してくださることに、21世紀の教会は目覚めなければなりません。

3. エフェ

今日に至るまで、特に東洋の国の殆どのキリスト者たちは、まるでユダヤ人をキリスト教とは何の関係も

2006年7月(主日B年)

ない民族のように感じて来ました。イエス・キリストが私たちに与えてくださった罪の赦しと永遠の命の福音が、元来はユダヤ人に約束されていたものであるという事実を、知りませんでした(ロマ9:4-5 参照)。全く不思議なことに、たとえ聖書を読んでいても、これまでこの事実に関しては“目が完全に節穴”であったことに驚かざるを得ません。

パレスチナのハマスを攻撃していたイスラエルの戦闘は、7月12日のヒズボラによるイスラエル兵2名の拉致に端を発してレバノンへと拡大しました。まさにその12日にイスラエルのオルメルト首相と会談した日本の小泉首相の“最大限の自制を求める”という姿勢と、19日になっても“ヒズボラ弱体化のための軍事行動をなお一週間程度容認する”という米国の姿勢との対比の背景に、その幾分かの要因として神の民イスラエルとしてのユダヤ人の信仰があることを忘れてはなりません。イスラエルは自らの生存権のために戦いを続けているのであり、ハマスも、ヒズボラの背後にいるイランも、イスラエルの生存権を明確に否定しているということの重大さを、東洋のキリスト者は未だ殆ど理解していません。

ユダヤ人と異邦人という二つのものを隔てる壁を取り壊し(v.14)、共に約束された神の国を受け継ぐ者、同じ約束にあずかる者(エフェ3:6)としてくださる福音を、死人の中から復活して生きておられる主イエス御自身が自ら真の羊飼いと語りかけ、教えておられるということこそが、あらゆる混乱と絶望の中にある現代の教会にとっての慰めなのです。

そのようなキリストのことは、慰めの福音を、主日のミサごとに朗読される聖書から聞き取ることの出来る人々は幸いです。天の国はそのような人たちのものだからです。

ハレルヤ、アーメン。

7月30日 年間第17主日

王下 4:42~44 エフェ 4:1~6 ヨハ 6:1~15

1. ヨハ

v.4 「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。」

ヨハネ福音書は、イエスが五千人に食べ物を与えられた奇跡の物語りを、主の受難と復活に結びつけて理解するのを助けるために、この言葉をここに挿入しました。教会が祝う感謝の祭儀が、“キリストの血にあずかり、キリストの体にあずかること”(Iコリ10:16)であるという初代教会の伝承を、この福音書はその独自の語り方で私たちに伝えてくれます。ですから、洗足木曜日の物語りでも再び、同じ言及がなされました(ヨハ13:1)。

v.14 「そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、“まさにこの人こそ、世に来られる預言者である”と言った。」

私たちが感謝の祭儀で、ことばの典礼を通して、また感謝の典礼を通してお会いする方は、「神が既に聖書の中で預言者を通して約束された」(ロマ1:2-4)救い主イエス・キリストです。この方は「来るべき方」(マタ11:3)でありました。そして今なお「やがて来られる方」(黙1:4)であります。私たちは「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ1:7)

ですから、私たちがキリスト教という宗教を、現代の政治的、社会的、経済的諸問題の解決に役立てようとして、神と神の救いの御業よりも、人間の判断によって方向付けようとするとき、イエスは退いて姿を隠されます(v.15, 6:26-27 参照)。

2. 王下

イエスによる五千人への給食の奇跡は、旧約聖書のエリシャの物語りを想起させるものでありました。エリシャに働いて奇跡を起こさせたイスラエルの神ヤーウェが、再びイエスに働きました。それは、“まさにこの人こそ、約束の救い主である”ことを人々に示す“しるし”でありました。

奇跡は“驚き”であり“力ある業”ですが、イエス・キリストとその救いへの信仰なしには、ただの“不思議な業”でしかありません。聖体の秘跡は、信じる私たちには「永遠の命に至る食べ物」(ヨハ6:27)であり、父なる神はこれにあずかる人を終わりの日に神の国に復活させてくださいます(ヨハ6:54)。かつて飢饉の中にある預言者の仲間たちを養ったエリシャの奇跡の物語りは、やがて来られる救い主イエスを指し示す約束をその中に含んでいたと、初代教会は理解しました。

奇跡をただの“不思議な業”としてではなく、イエス・キリストとその救いへの“しるし”として信じることの出来る人は、幸いです。

3. エフェ

v.4 「あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれている ……」

このキリスト教的な希望、福音の希望とは、異邦人である私たちキリスト者がユダヤ人と一緒に神の国を受け継ぐ者、同じ約束にあずかる者となるという希望です(エフェ 3:6)。そのために神は、罪のために死んでいた私たちをキリストと共に生かし、救って下さいました(エフェ 2:5)。人の知識をはるかに超えるこのキリストの愛を知って(エフェ 3:18-19)、教会が信仰の一致の上に“造り上げられていく”ことを期待した使徒たちの言葉は、今も聖書を通して現代のキリスト者に語り続けています。

教会の一致とは、「あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づくもの」(コロ 1:5)であることを、使徒たちは語りました。しかし、現代の教会はこのキリスト教的な希望、福音の希望について無知であるか、あるいは意図的にこれを別のものに置き換えてしまっています。キリストの愛が人間の愛に置き換えられ、キリストの平和ではなくて政治的人道的な見せかけの平和が追求されています。

昇天のキリスト、そしてやがて来られる方であるキリストは、現代の教会に向かって、これを試みようとして再び、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(ヨハ 6:5)と言って、問いかけておられます。今朝の朗読聖書を通して語られる奇跡を、ただの“不思議な業”としてではなく、イエス・キリストとその救いへの“しるし”として信じることの出来る人は、幸いです。

ハレルヤ、アーメン。